



TITLE:

明夷待訪録當作集

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 明夷待訪録當作集. 東洋史研究 1965, 24(2): 211-214

ISSUE DATE:

1965-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152693>

RIGHT:

明夷待訪錄當作集

宮 崎 市 定

中國の書物には非常に誤字が多い。それは漢唐の古典ばかりでなく、近世の著述においても同様である。しかもその誤字には、異版を用いて對校して訂正できるものと、それが不可能な場合とある。更に困ったことは、漢文においては一字というものは、歐文における一語に相當する。歐文においては語中一字のミスプリントならば、讀んだだけですぐ發見できるが、もし一語が違っていたとしたらば對校しない限り、その誤を斷言しにくい。同様に漢文においては一字の中の筆畫の誤りはすぐ訂正できるが、字そのものが別字になっていた誤は、容易なことでは發見できないし、發見しても證據がなければ、斷定することがむづかしい。ところが實際においては證據がなくて誤っている場合が非常に多いのである。そういう場合、對校する異本がな

くても、そのまま放っておくべきではない。何故かといえ、分らない文章ほど後世の人に迷惑をかけるものではなく、分らない文章を讀もうとする時ほどエネルギーを浪費することはないからである。

もちろん此方の學力が足りなくて、讀める文章が讀めない時もある。併しどうしても分らぬ時は、一應は誤字がないかと考え、前後の文意から、こうなくてはならぬと見當をつけるのが本當の本の讀み方である。あらゆる科學のあらゆる分野において、假説を設定することが、その最初の着手であると同時に、その最後の結論でもあることを思えば、清代考證學の、證なきは信ぜず、という教條をそのまま墨守して、自ら萎縮してしまふ必要はない。

明夷待訪錄は近世の書であるにも拘わらず、異版が多

く、版ごとに文字の異同がかなりある。そしてこれらを對校することによって、互いに誤字を訂正することの出来る場合もあるが、不幸にして我々は原刊本を見ることができぬので、最後の決定を保留したまま、讀めない部分の訂正を試みるのも無駄ではあるまい。これが、明夷待訪錄當作を公表するに至った理由である。對校に用いた版は次の通りであるが、底本には新興書局本を用いた。この書は誤字が最も多い上に、一頁九行、一行二十一字で最も廣く共通する形式だからである。對校して訂正できる明かな譌字も併せ録した。

- 1 國學基本叢書本
民國四十八年臺灣新興書局覆指海道光
十九年錢熙祚校本
- 2 小石山房叢書本
- 3 海山仙館叢書本
又四部備要覆海山仙館本
- 4 梨洲遺著彙刊本

なお文中、原文は誤字、當作は斯く訂正すべき文字、一作は異版に異字を用いるも従い難きものである。頁數は本文のみを數えたので新興書局本の頁數と合致しない。

①二頁八行。有人者出。君人者出・之譌。

諸本多く有に作り、近出の中國哲學史資料選輯清代之

部の中の明夷待訪錄選錄もまた同じ。これでは讀めぬので、竊かに有は形似により、君を誤ったのであらうと考えた。先ず君人者と出し、後文次に其人とうけ、やがて人君と定着させたと讀めば意味がよく疏通する。ところが、念のため小石山房本を見たところ、ちやんと君に作つてある。本稿を發表するに至ったのはこれによって若干の自信を得たのと、いくらか善本がありそうな中國で資料選輯本が誤りをうけているのを見て刺戟されたからである。

②三頁三行。量而不欲入者。當作・匿而不欲入者。

諸本多く量に作る中に、遺著彙刊本は去之の二字に作る。一理あるに似て實は然らず。去るといえば一度その位についてからでなければならぬことが難の一、待訪錄の誤字は一字が一誤字となるのが普通であるが、一字を二字とすること難の二、形似の共通なものないことが難の三である。故に形の近似より匿と改めてみたが、筆畫の繁なる點からすれば或いは遜かも知れない。

③十頁一行。不以天下萬民事事。不以天下萬民爲事・之

譌。

下文に兩度、不以天下爲事。とあり。

④十九頁二行。有明之閣下。當作・有明之閣臣。

閣下はむしろ尊稱であるから、閣臣という普通の語を用いるに如かず。下文同じ。

⑤二二頁七行。大師旅則會將有。大師旅則會將士之譌。

⑥二四頁。毋得由自遷除。當作・毋得由部遷除。諸本多く

は、毋得出自遷除。に作る。由と出と形相似たるも、文章としては意味不十分である。部と自とは相似ざるが如くして實は共通の部分がある。部の字形がかすれて、上の點と、旁の横棒四本と、扁の從棒とが残ると自に近くなる。

⑦三六頁二行。唐之士及第者。當作・唐進士及第者。

前文に、唐進士試詩賦。とあるに相應ずる。思うに進字がかすれて、禿のみが残ったのを之と讀んだ誤りであろう。待訪錄の誤字が形似より出ずる一證左となるう。

⑧三六頁四行。宋雖登弟入仕。宋雖登弟入之之譌。

⑨三九頁一行。周程張朱陸六子。周程張朱陸六子之譌。

⑩五一頁。九州之田不歟於上。九州之田不授於上之譌。

⑪五四頁六行。古之聖君方授田。當作・古之聖君乃授田。

下文に、今民所自有之田。乃復以法奪之。の乃と用法相同じ。

⑫五五頁一行。可爲而不爲爲足惜。

諸本一爲字を省くは不可。文勢上、爲足惜とあるべき所である。

⑬七三頁三行。干涉文臣。干謁文臣之譌。

⑭七七頁九行。方自以犬牙交制。當作・方且以犬牙交制。

⑮八〇頁一行。卽一人以力聞。

四部備要本に、卽一人以力聞、に作るは非。

⑯八一頁六行。三代以丁用者粟帛。當作・三代以下用貴

粟帛。

丁字は諸本多く下に作る。用者粟帛の句は意味が通じないこともないが、これでは文章として拙。下文に、錢與粟帛爲輕重、また、雖錢與粟帛雜用。猶不欲使其重在錢也、とあり。初め者を重かと考えてみたが、形似の上から貴の方が適當であらう。

⑰一〇〇頁五行。尙然末主之事。

文脈暢達でない。彙刊本に、然尙末王之事、に作る方がまだましであらう。然字の位置顛倒するかと考えられるものは外に、二三頁六行の猶然は、然猶に作るべきか。但し三一頁五行の猶然經義也、はこのままでよい。

⑮一〇一頁夫非盡人之臣敷。當作・夫非盡心之臣敷。

この盡心は、彼が孟子師說卷七に説明しているような哲學的意味を以てでなく、當時の俗語的用法に従ったのであらう。黄宗羲は起見のような俗語を本書の中で用いている例がある。

東洋史研究叢刊

第十四 清朝前史の研究

三田村泰助 著

本文 約五〇〇頁 豫價 二五〇〇圓
十月下旬發賣豫定

第十三 金朝史研究

外山 軍治 著

本文 六七五頁 年表一三頁
索引 三〇頁 定價 二八〇〇圓

第十二 中國征服王朝の研究 上

田村 實造 著

本文 四四四頁 定價 二二〇〇圓

右書御希望の方に本會までお申込み下さい

京都市左京區吉田本町京大文學部内

東洋史研究會

振替京都三七二八番